

## 論文概要書

### 西脇順二郎論 ― 同時代の雑誌との関わりを中心に ―

崔 世卿

本研究は、詩人西脇順二郎の『Ambarvalia』から『近代の寓話』までの作品について同時代の詩壇との関わりに主眼を置き、検討を試みたものである。

西脇研究はこれまで、同時代から切り離されて行われてきた。これは西脇は詩壇と関わらない印象が強いことが要因だと思われる。しかし、西脇は詩壇の本流ではなかったが、常に雑誌に詩や詩論を発表し、それらを収めた詩集を刊行してきた。『Ambarvalia』においても『近代の寓話』においても雑誌との関わりがあり、書き下ろしと思われやすい『旅人かへらず』でさえ部分的に雑誌に発表されている。

西脇と雑誌との関わりの研究は、これまで本格的に試みられたことがない。それを一端としてあれ、試みようとするのは、より明確な西脇像に近づくためである。

このような問題意識を持つに至ったそもそものきっかけは、『近代の寓話』の諸篇の初出未詳が目立つことによる。西脇は他の詩人に比べ、全集類が充実しており、西脇研究の歴史も長いなか、一冊の詩集に四篇の詩の初出がはつきりされていないことに疑問が生じ、その所在をさぐるべく、発表媒体の雑誌と各作品を結びつけて検証しようと思うに至った。作品をより正確に読むためには、ますます基礎資料の探索を中心とする実証的な研究を行うていかなければならない。

こうした本研究は次の三点をねらいとする。

まず、同時代の雑誌との関わりから詩集所収の作品について検討することを目的とした。西脇は詩集の印象が強く、それら作品の発表誌の存在は看過されてきた。しかし西脇の詩人としての活動には発表雑誌の存在が大きく、また同時代状況と無関係にはいられない。

次に、西脇の詩史の区分を再検討し、作品の生成過程を考察した。西脇の詩史には昭和初期と戦時中の沈黙期と戦後の再開といった大きな区分がなされてきたが、昭和初期をさらに細かく区分した。この昭和初期は西脇が詩人として出発した時期であり、第一詩集を出すまでの八年間を一つに括って考えることを否定し、新たに初期を区分した。

最後に、新たな基礎資料を探求し、より確かなテキストの読みを試みた。先述したように西脇研究は基礎資料探求が停滞している観がある。基礎資料に基づいてこそ成り立つ作品論もあるため、基礎資料の探求による研究の成果を期待し、そうした研究史の隙間を埋めることを目指した。

他方、こうした同時代との関わりの検討を試みるには西脇が活動した同時代の諸雑誌を

細かく調べていく必要がある。ところが、一冊の詩集に長い年月が横たわっており、なおそれが戦後まもない混沌とした時期の場合、資料探求は容易な作業ではない。

第一部は西脇の詩的出發期から『Ambarvalia』成立までの西脇の初期時代を視野に入れつつ、『Ambarvalia』を中心に西脇の初期の作品と同時代の雑誌を結びつけて考察した。これまで初期の西脇を論じる際、『詩と詩論』を取り上げることが多く、主にシュルレアリスムのことが論じられている。一方、「ギリシア的抒情詩」の発表誌である『MADAME BLANCHE』『椎の木』『尺牘』の存在は軽視される傾向があった。だが、本論の第一部では詩人として出發してから『Ambarvalia』を出した頃までの、西脇と同時代の雑誌との関わりについて考察し、西脇の初期の詩業をより正確に把握することができた。

第一章「紙芝居Shylockiade」論―匿名時代が意味するもの―においては、西脇の詩業の初期時代区分を見直すことを試み、新たに匿名時代と第一次詩的沈黙期を入れることを提示した。また「紙芝居Shylockiade」を匿名時代最後の作品として位置づけ、詳細に読み込むことを目指した。

西脇順三郎は大正十一年から大正十四年まで三年間イギリスに留学している。三年という留学期間は長いとは言えないが、重要なのは期間の長短ではないだろう。西脇が留学していた期間はヨーロッパで新しい文学運動が盛んに起こり、西脇はそれらを吸収し、帰国の途についた。帰国後、慶応義塾大学の教員となった西脇は『三田文学』に詩や詩論を発表している。「プロファヌス」などシュルレアリスムを中心とした詩論を発表し、昭和初期の新詩精神運動に属する人達に多大な影響を与え、西脇自身もこれを発端として『詩と詩論』に寄稿することとなる。しかし『詩と詩論』には創刊号から昭和五年三月号まで匿名を用いている。また西脇は同じ時期に刊行されたシュルレアリスム機関誌『衣裳の太陽』には創刊号から終刊するまで全六冊のすべてに匿名を以って詩を発表している。本論ではこの昭和三年から昭和五年までの時期に着目し、この時期を「匿名時代」と称して西脇の初期時代区分に新たに入れることを試みた。また匿名時代の後、昭和五年三月から昭和八年一月『MADAME BLANCHE』に「コリコスの歌」を発表するまで、詩作を絶っていることに注意し、この時期を第一次詩的沈黙期とした。すなわち、西脇の詩史のなかで初期は、詩的出發期に当たる『三田文学』時代、匿名時代、第一次詩的沈黙時代、そして『Ambarvalia』時代に区分できる。『三田文学』時代に西脇は「詩論を書くこと」と「詩を書くこと」を並行に行っており、西脇自ら言っているようにある種の使命のような観があった。詩論を発表し、その実作としての詩を発表することで、この時期の西脇は日本の詩壇に同時代のヨーロッパの新しい詩を伝えようとしたのである。『三田文学』にはこうした使命感をもとに実名で詩論や詩を発表していた西脇は、雑誌『詩と詩論』と『衣裳の太陽』においては匿名で発表している。そこには西脇順三郎は居らず、JACOBUS PHILIPUSとI.

P・Hがいるだけである。名前を匿した西脇は過激なシュルレアリスム詩を実験的に書いて発表していたが、昭和五年三月『詩と詩論』に「紙芝居Shylockiade」を、J・Pの名前で発表したのを最後に匿名を捨てたのであった。そして『MADAME BLANCHE』に「コロユスの歌」を発表するまで詩作を止めている。「紙芝居Shylockiade」はそのスタイルにおいて、内容において、『三田文学』時代や匿名時代のそれとは異なっており、このことは西脇が自分において新しい詩を模索し始めたことを意味するのである。そしてこの模索の時期は昭和八年一月まで続き、西脇は「ギリシヤ的抒情詩」諸篇のスタイルに辿りついたと考えられる。この匿名時代の最後の作品でありながら、第一次詩的沈黙期に入る直前に書かれた「紙芝居Shylockiade」は、西脇本人や同時代評では高く評価されたが、西脇研究ではまず取り上げられない。おそらく劇詩というスタイルの面と、古代ギリシヤや中世ヨーロッパの文学のイリュージョンに満ちていることなどがその理由として考えられるが、匿名時代と第一次詩的沈黙時代の境界線に置かれた、大変重要な作品なのである。

第二章と第三章では「ギリシヤ的抒情詩」の発表誌と西脇』について検討した。第二章では椎の木社の雑誌『椎の木』『尺牘』と西脇について考察した。椎の木社は百田宗治の同人誌社で、この二つの雑誌に西脇はそれこそ活発に詩を発表しており、百田の勧めで詩集『Ambarvalia』を出すこととなる。第一次、第二次、第三次の展開をもつ『椎の木』に西脇が実際に関わるのは第三次であるが、第二次昭和四年五月号のシュルレアリスム特集号に西脇のアンケート回答が載っていることを第二次『椎の木』編集者の阪本越郎の言説により確認した。つまり第三次『椎の木』にはシュルレアリスムを取り入れる土台がすでに形成しており、西脇は古い詩と新しい詩の両方を受け持った雑誌『椎の木』を選んだのである。ところで、同じ椎の木社から刊行された雑誌『尺牘』だが、『尺牘』は他ならぬ「ギリシヤ的抒情詩」の母体となる「ギリシヤ的抒情詩」を発表した雑誌である。だが、現在の言説では椎の木社のPR誌とされており、十分に正当な評価がなされていない。当時『尺牘』に発表した「ギリシヤ的抒情詩」は反響が大きく、この事実だけでも『尺牘』をPR誌と見なすことを再考しなければならない。『尺牘』が椎の木社のPR誌とされているには、その内容にある。椎の木社から刊行されたか、刊行予定の作家の既発表作品が度々掲載されているのである。だが、当時再掲載されることは他の雑誌にもあった。そして、何より西脇がほぼ毎号新作を発表し、それらの詩篇がキツカケとなって『Ambarvalia』出版が構想されたことを忘れるわけにはいかない。それだけでも『尺牘』の存在意味はPR誌ではないと言える。

第三章の「アルクイユのクラブの『MADAME BLANCHE』」では、西脇が第一次詩的沈黙期から脱出し、詩作を再開した雑誌『MADAME BLANCHE』を取り上げ、西脇と結びつけて考えた。『MADAME BLANCHE』はアルクイユのクラブの機関誌として創刊され、西脇はそのクラ

ブ員として所属している。西脇が第一次詩的沈黙期の後、旺盛に詩を発表した『MADAME B LANCHE』と『椎の木』は、その刊行時期やメンバーが重なっている。この両誌の間に実際スキヤンダルとも言えることが起こり、誌面の上で攻防が交わされていたが、それはいわゆる良きライバルとしてであり、発展的な意味の攻防だったと言える。まったく異質な雑誌同士ならば、論外とするだろう。雑誌の性格上、『MADAME BLANCHE』は喧嘩口調だったが、『MADAME BLANCHE』を編集していた北園克衛も言っているように雑誌として『椎の木』を認めたからこそのことであった。そしてこの両誌に西脇は詩作の意欲が薄れていくまで、詩を発表し続けていたのである。ところで、西脇は『MADAME BLANCHE』が終刊した後もクラブ員として居続け、その後誌『JANGLE』に参加していたことが確認できた。

『JANGLE』の創刊号には西脇の昭和五年出版の英語詩集『Poems Barbarous』が北園克衛により訳載されているが、創刊予告では西脇の詩とエッセイが掲載される予定だったのが、新作ではなく、私家版英語詩集の再掲載になったのである。『JANGLE』が創刊された昭和十年一月はすでに西脇が詩作から離れつつあった時期であった。『MADAME BLANCHE』と『椎の木』は西脇の詩史の中で第一次詩的沈黙期と第二次詩的沈黙期の間に位置しているのである。

第四章の「詩的沈黙期からの脱出」では、昭和五年三月「紙芝居Shylockiade」以降詩を一切書かなかった西脇が詩的沈黙から脱出し、昭和八年一月に「コリコスの歌」を『MADAME BLANCHE』に発表することで詩作を再開していること、そしてのちに総題「ギリシア的抒情詩」に収まる詩篇を次々と『MADAME BLANCHE』『椎の木』『尺牘』に発表していることに注目した。

『椎の木』や『尺牘』に発表された詩を見ると、「ギリシア的抒情詩」諸篇のような短詩がこの時期の支配的詩形をなしていることが窺える。ただし、『Ambarvalia』刊行以降、詩作が著しく減っていくなか、「ギリシア的抒情詩」の短詩群とは異なった作品が発表されており、それは戦後刊行された『旅人かへらず』に見られる詩風のものである。一方、『MADAME BLANCHE』に発表された西脇の詩はのちに「ギリシア的抒情詩」に収められているが、他の「ギリシア的抒情詩」と同様な短詩形でありながらも、その言語表現やイメージは異なっている。短詩形でかつギリシヤ的イメージが描かれているが、イメージの連結が突発的であり、なかにはフォルムを意識した作品もあるなど、西脇が『MADAME BLANCHE』には多様なスタイルの詩を試みたと言えよう。

第五章の「『Ambarvalia』生成考―ギリシア的「抒情詩」と「ギリシア的でない」抒情詩」では、『Ambarvalia』の成立過程を分析しつつ、西脇が『Ambarvalia』のために詩集刊行前に書き下ろした詩篇を「ギリシア的」抒情詩と「ギリシア的でない」抒情詩という観点から読むことを試みた。アンソロジーである『Ambarvalia』の構成には取捨選択とい

う問題がある。当初詩集収録の予定だった作品が取り消されたり、最初の構想の段階から詩集に収録されなかった場合があるが、いわゆるシュルレアリスムの実験性が著しい作品は収録されていない。そして『Ambarvalia』には既発表の詩の他、急遽詩集に収めるため書き下ろされたと思われる作品群が存在するが、この書き下ろしの作品群は詩集収録時『LE MONDE ANCIEN(古代篇)』の「ギリシア的抒情詩」と『LE MONDE MODERN(近代篇)』の「失樂園」に分かれて配置されている。詩のスタイルにおいては共に短詩形であり、抒情詩であるが、「ギリシア的抒情詩」に収まらず「失樂園」に収まった詩篇は突如異質なイメージが出てきているのである。

第二部は『近代の寓話』と新出資料を中心に検討した。『Ambarvalia』刊行後、少しずつ詩作から離れていった西脇は昭和十一年六月『学芸』に「夏の日」を発表したことを最後に十年間詩作を絶っているが、本論ではこの時期を第二次詩的沈黙期とした。終戦後、西脇は昭和二十一年八月に『芸林閒歩』に「草の葉」を発表することで詩作を再開している。第一次詩的沈黙期は作品の方向性についての問いかけの時期と言えるが、第二次詩的沈黙期は戦争という外的要因によるものであった。西脇が第二次詩的沈黙期を経て発表した詩と詩論はそれまでと著しく変化し、「淋しい」詩情が作品前面に出ている。戦前の第一次詩的沈黙期から『Ambarvalia』への変化は労作実践の変遷であり、戦時中の第二次詩的沈黙から戦後への変化はメンタル・プロセスの代償と言えよう。昭和二十二年に刊行された『旅人かへらず』は連句形式をとっており、これら詩句は戦後、『芸林閒歩』に発表されたものと書き下ろしで構成されているが、詩的構想はすでに戦前なされていた。そして『旅人かへらず』刊行以来、西脇は一部雑誌に集中して発表することはなくなり、実に様々な雑誌に詩を発表している。詩をその初出発表の時点に戻して見ると、詩集だけから見ているとは違った様相が見えてくる。これまで初出未詳とされていた『近代の寓話』所収の四篇の初出が、本研究を進める中で確認できたことで西脇研究において大きな可能性が開かれると確信する。その所在が確認できた「かざり」（『芸苑』昭和二十三年一月）『プロサラミョン』（『婦人公論』昭和二十五年三月）「午後の訪問」（『ラジオ文芸』昭和二十六年十月）「南画の人間」（『小説公園』昭和二十七年一月）のうち、「かざり」と「午後の訪問」を取り上げ、考察した。

第一章の「新資料「かざり」をめぐって」では初出形と詩集形の二つの本文の間に著しい異同があることについて検討したが、その異同は発表誌である『芸苑』が大きな理由と考えられる。女性文学誌である『芸苑』に発表された初出形は女性雑誌向けの恋歌のようなムードとなっているが、詩集形ではそのような要素は取り除かれ、『近代の寓話』の主なパターンでもある散歩に出かけて人々に触れ合う内容に書き直されている。そして改変は詩の内容だけにとどまらず、文体にも及んでおり、初出形は名詞止めや連用形止めで書か

れているが、詩集形では口語になった上、「のだ」文が用いられている。「のだ」文は『近代の寓話』において多く見られる文体で、この二つの「かざり」の本文を通して初出形が書かれた昭和二十三年から詩集が刊行される昭和二十八年の間の文体の推移が見えてきた。この「新資料「かざり」をめぐって」論を進める中で、同じ時期に発表されておりながら、まったくその存在が埋れていた詩篇が確認できた。昭和二十三年六月号『暖流』に載っている「かすれた声」がそれである。ほぼおなじ時期に発表された「かすれた声」と「かざり」は詩の全体のイメージは似通っておりながら、スタイルにおいては異なっている。「かすれた声」では〈きんざしの花色の絹のスリッパに包む生命の緊迫に〉（七行〜八行目）と生命を詠い、〈凸面鏡に写る夫がはらめる妻の手を変な様子でとりあげる〉（十四〜十五行）とめおとが描かれているなど、詩的背景は「かざり」と類似しているが、〈来る女は人絹のハンカチフをもみながら〉そのかすれた低い声で『でも今更―』。〉（二十九〜最終行）というふうにはまだ『旅人かへらず』のスタイルと『近代の寓話』のスタイルが混在しており、「かざり」はまだ『旅人かへらず』の影が残っている一方、「かすれた声」はより『近代の寓話』に近づいていたのである。

第二章の「西脇詩における聴覚性」は新資料ラジオポエム「午後の訪問」を取り上げ、主に視覚性で論じられることの多かった西脇の詩を聴覚性で論じることを試みた。雑誌『ラジオ文芸』にラジオポエムとして発表された「午後の訪問」の存在は大きく、西脇が声に出して朗読されること、聴かれることを意識して書いた唯一の作品である。『ラジオ文芸』の同じ出版元からは『放送朗読詩集』というアンソロジーが出ているが、これは実際ラジオで放送された新作のラジオポエムを集めたものである。「午後の訪問」はその次に刊行された『朗読ラジオ詩集』に再掲載されている。この二つのアンソロジーは当時のラジオと詩の密着関係を示す重要な資料と思われる。先行する言説では『放送朗読詩集』を愛国詩の延長線と見なしているが、当時ラジオ文化が盛んになり、その中で詩がラジオで朗読されることが多かったこと、そして西脇がラジオポエムとして詩を発表したことから愛国詩と結びつけることは妥当ではない。「午後の訪問」は一見、『近代の寓話』諸篇によく見られるスタイルの詩であるが、ラジオで朗読される前提で書かれており、聴いて分かりやすい物語スタイルに会話文を入れることでより聴覚に訴えている。

第三章の「現代詩としての『近代の寓話』」では、同時代の詩壇の動向を視野に入れたつ、とりわけ雑誌『GALA』『天蓋』をめぐって考察した。日本の詩史を論じる際、近代詩と現代詩という概念が用いられるが、この区分は様々な議論があり、明確な区分で分けるのは容易ではないと言われる。終戦を迎えた日本の詩壇は過去を否定し、現代詩のあり方を問うこととなる。戦後昭和二十二年、『旅人かへらず』と『Ambarvalia』の改定版『あ

むぼるわりあ』を出した西脇は『旅人かへらず』のはしがきに、また『あむぼるわりあ』のあとがきに詩論を書いている。そして、当時の詩壇において現代詩を問う議論の中にその詩論や作品が現代詩の問題や可能性を探る材料として取り上げられるのである。

『近代の寓話』はいくつかの雑誌に集中して発表された『Ambarvalia』諸篇と異なっており、その発表誌は実に三十一誌にのぼる。雑誌との関わり方も変わり、『Ambarvalia』の時のように限られた雑誌に密着することはなかったが、『GALA』や『天蓋』との関わり方は他の雑誌とは異なっている。西脇は同人に関わらない印象が強い。だが、『GALA』には編集同人として参加しており、一回を除いてほぼ毎回詩を発表しているが、『GALA』の四人の編集同人とは安藤一郎、北園克衛、村野四郎そして西脇だが、戦前、『詩と詩論』で活躍し、五十歳になった戦後同人誌を出している。同時代の詩壇からはその作品の完成度の高さは認められながら、一方では現役ではないともされていた。西脇は自分だけの詩のスタイルを『GALA』を通して披露している。この時期、西脇と密接な関係にあった雑誌としてもう一つ『天蓋』の存在が挙げられる。小さい地方の同人誌に過ぎないこの雑誌は、西脇からほぼ毎回新作をもらい、さらに特集号として『旅人かへらず』以降諸雑誌に発表された西脇の作品を集めて出している。また『近代の寓話』が刊行される前の時点で、昭和二十四年から昭和二十八年一月の間に諸雑誌に発表された西脇の作品を収録している。雑誌の特集号というのは、普通対象とされる詩人の新作と旧作、そして寄稿家による評論などで構成されるものである。しかし、この『天蓋』特集号は西脇の詩二十四篇のみで成っている。事実上、『近代の寓話』に先行して出されたもう一つの『近代の寓話』と言えよう。